会　報

一般社団法人　日本病理学会
〒 101-0041
東京都千代田区神田須田町 2-17
神田 IN ビル 6 階
TEL：03-6206-9070
FAX：03-6206-9077
E-mail：jsp.office@pathology.or.jp
https://pathology.or.jp

一般社団法人日本病理学会　　第 448 号　　令和 7 年（2025 年）8 月刊

1.　卒前教育における病理学教育のあり方に関する見解

日本病理学会教育委員会では「病理学卒前教育に関するアンケート」を実施し，コロナ前（2019 年）からポストコロナ（2023 年以降）における教育動向を明らかにしてまいりました。その中で，卒前教育における “病理学” ならびに “病理診断” 教育のあり方が，各大学の状況により大きく異なってきていること，また，カリキュラム改定の影響を深刻にうけている大学があることが明らかになってまいりました。背景として，医学教育における student doctor 制度の導入，臨床実習を重視するカリキュラム改定，ならびに昨今の医師国家試験，医学共用試験，モデル・コア・カリキュラムにおける “病理学” ならびに “病理診断” 教育の位置づけが，必ずしも適切ではないことなどがあげられます。

日本病理学会教育委員会では，これらの現状を憂慮し，各大学におけるカリキュラム改定や，実際の教育に際しての留意事項として，以下の内容を提案いたします。

・卒前教育における病理学は，ヒトの病気の成り立ちを学ぶ「基礎と臨床の架け橋」となるコースであり，総論・各論と病理解剖症例検討（CPC）より構成される。
・病理学総論は，疾病の原因および本質に関する一般原則を考究する。特に，病的状態に関するすべての医学用語ならびに疾病時の肉眼的・組織学的変化について学習する。そのため，病理学総論は医学教育の根幹であり，臨床医学を学ぶ際の病態理解や臨床推論の科学的基盤となっている。基礎医学科目の水平統合の方針にあっても，全身の組織・臓器の顕微鏡的観察を通じて病理学の本質を理解している病理専門医が，病理学総論の教育を担うべきである。
・病理学各論は，総論だけでは学べない各臓器固有の疾患病態を学ぶ機会であり，病理専門医が系統的・俯瞰的に教育すべきである。臨床医学に傾倒した垂直統合の中に埋没され，科目としての病理学各論が廃止されることがあってはならない。
・時間数削減が求められる傾向にあるが，アクティブラーニング等の方略上の工夫により，病理学総論・病理学各論の双方において病理専門医による教育機会を確保するべきである。
・臨床実習（ポリクリ）の水平統合を行うとしても，実践的な病理診断の現場をみせる時間を十分に取り，将来病理専門医を志す人材を確保する必要がある。実際の clinico-pathological conference（CPC）に学部学生を参画させれば，病態の系統的理解を目指す病理学各論の総括となり，将来の剖検率低下に歯止めをかける効果も期待される。

2.　病理専門医更新

病理専門医資格更新の本年度該当者には，学会事務局より申請方法について 8 月 20 日にメールでご連絡をしております。ご不明な点がございましたら事務局までご連絡ください。ご自身の更新該当年は，会員システムより各自ご確認が可能です。更新のご希望がない場合も，必ず事務局宛にご一報ください。病理専門医資格保留中の方で本年度に更新（復帰）申請を希望される場合は，日本病理学会事務局までご連絡ください。必要書類を送付いたします。

申請締め切り：
2025 年 10 月 31 日（金）消印有効（郵送申請）
2025 年 10 月 31 日（金）23：59 （電子申請）

3.　口腔病理専門医更新

口腔病理専門医資格更新の本年度該当者には，学会事務局より必要書類を 9 月上旬に送付いたしました。該当であるにもかかわらず，必要書類が送付されていない場合は，事務局までご連絡ください。ご自身の更新該当年は，会員システムより各自ご確認が可能です。更新のご希望がない場合も，必ず事務局宛にご一報ください。口腔病理専門医資格保留中の方で本年度に更新（復帰）申請を希望される場合は，日本病理学会事務局までご連絡ください。必要書類を送付いたします。

申請締め切り：
2025 年 10 月 31 日（金）消印有効（郵送申請のみ）

4.　分子病理専門医更新

分子病理専門医資格更新の本年度該当者には，8 月 20 日に学会事務局より申請方法についてメールでご連絡をしております。ご不明な点がございましたら事務局までご連絡ください。ご自身の更新該当年は，会員システムより各自ご確認が可能です。更新のご希望がない場合も，必ず事務局宛にご一報ください。分子病理専門医資格保留中の方

で本年度に更新（復帰）申請を希望される場合は，日本病理学会事務局までご連絡ください。

申請締め切り：
2025 年 10 月 31 日（金）23 : 59（電子申請のみ）

---

5. 「レジナビフェア 2025 in 東京」活動報告

令和 7 年 6 月 29 日（日曜日）
場所：東京ビッグサイト（東京都江東区有明）
時間：11 時〜 17 時
参加者：宮崎（岐阜大），藤井・上田（横浜市大），大橋（東京科学大），佐藤（埼玉医科大），秋山（川崎医大），小林（藤田医大），竹内（京都大），小川（国保旭中央病院），前田（名古屋大），加藤・松平（病理学会事務局）

コロナ渦後，開催された 3 回目の対面のレジナビであった。ブースを訪ねてくれたのは学生 24 名･初期研修医 6 名･国外医学部既卒生 2 名：全部で 32 名であった。ひとり平均 25 分〜 30 分程度の面談であったが，面談が 30 分を超える学生もみられた。11 時開始で，11 時 5 分から撤収に入る 16 時 30 分まで一度も人が途切れることなく，ブース内は盛況であった。

医学部 3 年生から初期研修医まで：3 年生 1 名，4 年生 7 名，5 年生 14 名，6 年生 2 名，初期研修医 6 名，男女比は 19 : 13 であり，今年は男性優位であった。

今回の印象：

今年度のレジナビはコロナ後 3 回目として対面で実施されたものであり，やや正常化しつつある雰囲気を感じさせるものとなったブース内のみでは対応が追いつかず，ブース前にも線を越えない範囲でイスを置いて面談が進められた。今年は午前中オープン直後から途切れることなく来訪者があり，その後ずっと盛況が続いた。（ウェブ用写真参照），病理専門医の認知度が高まり，進路として考えている学生の母数は多いものと実感した。今回も，関東からの参加者が相対的に多かったが，北海道，中国地方・四国地方など遠隔地からの参加者も散見した。また，チェコや中国の医科大学を卒業した日本人医師が進路として病理を真剣に考え，来訪してくれているケースがあった。病理医になることをほぼ決めて訪問する学生と，放射線科・麻酔科と病理のいずれかを考えているという学生もそれなりにみられた。国公立と私立大学では，今回は国公立大学出身者がやや多数を占めた。昨年新調した横断幕がかなりキレイで目立ったため集客力も十分にあったと思われる。

総括

1） 32 名と十分な訪問者があった。昨年とほぼ同数で，切れ目なくらい訪問があり，一人あたりの面談時間もかなり長く，内容が充実した。今後もこの活動を続ける価値があると感じている。（レジナビ全体：436 施設，参加者 2,564 名）

2） 出身大学では国公立大学と私立大学の学生の割合国公立大やや優位であった。関東地区の学生が 16 名と多かったが，北海道から高知県まで全地区からの訪問があった。5 年生が最も多かったが 3 年生の参加もあった。研修医も 6 名訪問してくれた。

3） 個別の相談も多く，一人あたりの面接時間が 30 分を超える学生もいた。

4） 病理学会特製のうちわを面接者に配布し（ウェブ用写真参照），好評であった。

5） 女性病理医の佐藤先生，上田先生に参加していただいたおかげで，バランスの良い面接をすることができたと思う。

（病理医・研究医の育成とリクルート委員会委員長
宮崎龍彦）

参照 HP：https://pathology.or.jp/gakuken/seminar.html

---

6. 2025 年英国病理学会／ Ghent Pathology 2025　参加報告

2025 年 6 月 24 日から 26 日にベルギー王国・ゲントで開催されたベルギー病理学会・英国病理学会共催大会に参加した研究者から報告書が届きました。

P4 から P9 をご参照ください。

ベルギー病理学会(Ghent Pathology 2025)派遣報告書

国際医療福祉大学成田病院　小無田美菜

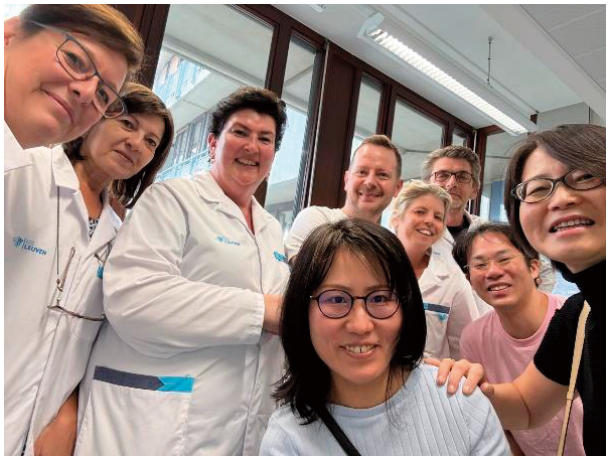
2025年6月24日から26日まで、ベルギーのゲントで行われた Ghent pathology 2025 (BSP-BDIAP-PathSoc の共同開催)に、福島県立医科大学医学部　基礎病理学講座の小林信先生と神戸大学医学部付属病院　病理診断科の神保直江先生とともに派遣していただきました。このような素晴らしい機会を与えていただきました、小田義直理事長、都築国際交流委員長をはじめとする関係各位の先生方に深謝いたします。

Ghent pathology では、診断病理と研究のバランスがとれたプログラム構成で、大変勉強になりました。また、小林先生と神保先生のご発表もとても好評で、活発な質疑応答が行われました。小林先生と神保先生は、会期中も積極的にいろんな先生方と交流を深め、最終日には新しく友人となられた先生方とコーヒーを飲みながら談笑されていたご様子が大変印象的でした。

また今回は、国際交流委員会の都築委員長の了解を得て、私が以前勤務していたベルギー最大の大学病院である UZ Leuven ならびにゲント市内にある St.Lucas 病院 の病理部門の見学も併せて行いました。日本と異なる病理システムに小林先生と神保先生も大変興味をもって、いろんな質問をされていました。

私自身は、6年ぶりの Ghent pathology への参加となり、旧知の友人や先生方、かつての教え子たちと再会でき、とても心温まる時間を過ごしました。

ベルギー滞在中は、毎日刺激的でとても充実した日々でした。小林先生と神保先生とご一緒できて本当に良かったです。このような機会をいただき、心より感謝申し上げます。



UZ Leuven 病理

技師さん達と一緒に記念撮影

St.Lucas 病院

左から神保先生、Katrien,小林先生、筆者

Katrien（病理医）は空手の黒帯で、空手サークルを作り、ベルギー人に空手を教えています。

右から Pathological Society (PathSoc)の Meeting Secretary Prof. Mohammad Ilyas、

著者、

BDIAP (IAP-British division)の President
Dr. Jan von der Thüsen

St.Luc 時代の教え子（左 Eric, 右 Alex）と一緒に。

2 人とも現在、基幹病院の病理部門の責任者として病理診断とラボ運営を行っています。

今でも肝胆膵病理を好んで診断していると言ってくれて、とても嬉しかったです。

英国病理学会（Ghent Pathology 2025）派遣報告書

福島県立医科大学 医学部 基礎病理学講座 小林 信

2025 年 6 月 24 日～26 日の 3 日間、ベルギー王国で開催されました Ghent Pathology 2025 に参加させていただきましたので報告いたします。今回の学会は英国病理学会とベルギー病理学会の共催で、ベルギーの首都ブリュッセルから電車で 30 分ほどの Ghent にある国際会議場で開催されました。蒸し暑い福島市とは異なり、涼しく過ごしやすい気候で青空のもとでの学会参加となりました。学会会期の 3 日間は Welcome drink dinner、Conference dinner、Committee dinner と各日のディナーにもご招待をいただきました。英国病理学会・ベルギー病理学会の committee メンバーの先生方との会食を通して親睦を深めることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

今回の英国病理学会派遣におきましては小無田美菜先生のご紹介のもと、6 月 24 日には Leuven にある KU Leuven 大学、6 月 25 日には Ghent の Sint-Lucas 病院をそれぞれ訪問させていただきました。KU Leuven 大学では病院病理部及び Olivier Govaere 先生が主催する研究室を見学いたしました。病院病理部においては高度に効率化された設備とスタッフの方のチームワークにより一日に数千枚の標本をさばいておられました。また研究所の Olivier Govaere 先生の研究室には 3 名の学生がおられまして、各学生はまず研究室の柱となる大きなプロジェクトを任され、並行して各自が主体となったプロジェクトを進めるスタイルで研究しておられました。私たちのために研究紹介の時間を確保していただき、最新鋭の設備や質の高いサンプルを使った興味深い研究をいくつもご紹介いただきました。各人が取り組むテーマに前向きに、自分で考えながら研究を遂行する姿に私も感銘を受けながらプレゼンを拝聴しました。

Ghent Pathology に話を戻しますと、本学会の会期は 3 日間、Ghent St. Pieters 駅から徒歩 10 分の国際会議場での開催でした。基調講演、教育講演、一般口演、ポスター発表など日本病理学会総会と同様に多岐にわたる発表があり、会場は 7 部屋、一般口演は臓器別プログラムとなっておりました。私は 6 月 26 日午前 10 時 30 分から開催されました Oral free presentation セッションにおいて、神戸大学の神保直江先生に続いて発表しました。発表時間 10 分間、質疑応答 5 分間です。日本の多くの学会とは異なり厳密に時間計測がされず、発表の時間配分は各人に委ねられておりました。私の発表テーマは「Cell surface proteomics identifies SPON1 as a novel prognostic marker and therapeutic target in ovarian cancer」でして、これはタンパク質の網

羅的解析に基づく卵巣癌の新規予後マーカー・治療標的分子を同定する研究です。発表の際は専門外の先生にも伝わるようなるべく簡潔な説明を心掛けて発表を致しました。私以外ほとんどの参加者は病理医の先生方であったことからどこまで研究が伝わるかとても不安でありましたが、発表後の質疑では本会議 Meeting Secretary の Mohammad Ilyas 先生と座長の Meng-Lay Lin 先生からそれぞれ質問をいただき、発表後にも複数の先生から研究手法や詳細について質問をいただきました。今までに受けたことのない踏み込んだ質問もいただき、新しい研究のアイディアとなる意見交換もすることができました。

最後になりますが、英国病理学会への派遣をご選考いただきました日本病理学会国際交流委員会の先生方、関係各委員会の先生方、日本病理学会事務局の皆様に御礼申し上げます。また通常の学会参加ではできない特別な経験として KU Leuven 大学や Sint-Lucas 病院へのツアーをご企画いただきました小無田美菜先生、現地で分からないことや困ったことについて親身に相談に乗っていただきました神保直江先生に心から感謝いたします。

(左上) Ghent の街並み、(左下) Conference dinner での一枚。(右上) KU Leuven 大学の研究室にて Olivier Govaere 先生、小無田先生、神保先生と筆者。 (右下) 一般口演で質問に答える筆者。

Ghent Pathology 2025 滞在記（英国病理学会派遣報告書）

神戸大学医学部附属病院　病理診断科　神保直江

私は、2025 年 6 月 24 日から 26 日まで、ベルギーの Ghent で開催された Ghent Pathology 2025 に参加させていただきました。6 月のベルギーは雨が多いようですが、滞在期間中は天気に恵まれ、過ごしやすい気候の中、有意義な経験をさせていただきました。

1．学会について

日本病理学会総会と同様に、基調講演、一般口演、スライドセミナー、ポスター発表などが開催され、一般演題は臓器別で進行していました。基調講演では、研究と診療、多様な臓器にまたがる多岐な内容で、発表者も学生から教授クラスまで様々で、大変興味深く拝聴しました。若い学部学生が大規模研究を任され発表している姿に、年齢や立場を問わずチャンスが開かれていることを実感しました。私は 6 月 26 日の Oral Free Presentation セッションにて、“The Impact of Immunostaining-based Molecular Classification on the Diagnosis of Pulmonary Neuroendocrine Carcinoma” というタイトルで発表させていただきました。肺神経内分泌癌の病理診断の課題が、近年の分子分類の視点からどのように理解・説明できるかという内容です。座長の Meng-Lay Lin 先生と Stephanie Craig 先生、さらに会場の先生 1 名から質問をいただきました。椅子に座ったまま質問するスタイルが一般的で、距離があったため質問が聞き取りづらく焦りましたが、丁寧に聞き返すことで無事に対応できました。Meng-Lay Lin 先生とは、その後の coffee break でも話すことができ、有意義な時間となりました。

学会の雰囲気としては、まず女性の参加者が多く、服装も個性豊かで華やかでした。学会の中核を担う委員にも若手の先生や女性の先生方が多くいらっしゃることが印象的でした。また、学会中のコーヒーブレイクも文化として定着しており、休憩後にはコーヒーやワインを片手に会場へ駆け込む姿がよく見られました。会期中は Committee Dinner, Welcome Drink Dinner, Conference Dinner と各日のディナーに招待して頂き、更に 2 日目にはイギリスのグループの食事会にも参加させていただきました。パーティーやディナー中にはスマホを触れず、会話に集中する様子が印象的でした。

2．学会以外の活動

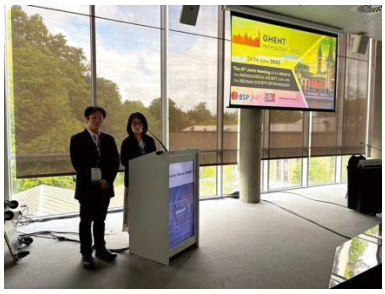
6 月 24 日には小無田美菜先生のご配慮により、ベルギー最大の大学である KU Leuven を訪問し、最新の研究施設や体制を見学しました。In-house での分子診断、病理標本の完全デジタル化、臓器別診断の徹底など、ベルギーの人口は日本の約 1/10 と小規模ながら、大学・医療・研究が高度に集約され、連携している印象を強く受けました。Olivier Govaere 先生の研究室では、大学院生 3 名の研究発表を拝聴する機会があり、それぞれが 1 年間でハイインパクトの雑誌に貢献していると知り、規模の大きさを実感しました。翌 25 日には、学会会場近くの Sint Lucas 病院も見学させていただき、ベルギーでは日常診療に次世代シークエンシングが一般的に使用されていることに大変感銘を受けました。

その他、周知の事実ですが、物価は日本の 2.5 倍ほどで、トラムの 1 区間の運賃が 3€（約 510 円）と高額でした。生活面では、歴史的建造物が立ち並ぶ中で電子化が高度に進んでおり、非常に便利だと感じました。

3. 自分の気づき

私は小学生と保育園児の子どもを育てながら病理診断と研究を続けています。これまで留学経験がなく、海外での学術活動は自分には遠い存在と感じていましたので、派遣が決まった当初は期待より不安が大きかったのが正直なところです。しかし、現地に足を運んでみると、学び続ける楽しさと、人と仕事に向き合う情熱を改めて実感することができました。英語は得意ではありませんでしたが、英国やベルギーの先生方が私の英語を理解しようと根気強く耳を傾けてくださったことに深く感動しました。最終日には学会場で知り合った先生方がわざわざ私たちの発表を聴きに来てくださり、大変感激しました。今回の滞在を通じて、「小さな子どもがいると海外に挑戦できない」という思い込みが自分自身の中にあったことに気づきました。子育て中含め、さまざまな立場の人が機会を得て活かせる環境こそが、国際性と多様性を支える基盤であると改めて感じております。

複数の幸運が重なって、今回の派遣が実現しました。最後になりますが、英国病理学会派遣をご選考くださった日本病理学会国際交流委員長の都築先生をはじめ、関係各委員会の先生方、日本病理学会事務局の皆さまに心より感謝申し上げます。また、派遣前から派遣中まで様々なサポートと企画をしてくださった小無田美菜先生に、心より深く感謝申し上げます。現地でさりげなくフォローしてくださったり、研究者としての視点を多く教えてくださった小林信先生にも、心から感謝いたします。



(左)発表前の 1 枚（中央）Ghent の町並みを背景に小無田先生、小林先生と筆者。(右) Committee Dinner での 1 枚。